年報　タイ研究　No.20, 2020　55－70.

【研究ノート】

# 〈廟〉における女性シャマンの組織と儀礼の変化

## ―― タイ北部、ミエン（ヤオ）社会における新たな宗教現象に関する中間報告 ――

# The Organisation of Female Shamans and the Changes of Rituals in a Shrine

## ―― A Report of a New Religious Phenomenon in the Mien Society of Northern Thailand. ――

吉　野　　晃*

YOSHINO Akira

A new religious phenomenon has occurred in the Mien (alternatively known as the Yao) society within the first decade of the 21st century. The phenomenon itself has several features. Fixed shrines were built in Mien villages, but because the Mien people have a long history in migration, they previously have not built any fixed religious structures before. In the shrines, females began to hold rituals as shaman-priests. In the past, female shamans or priests have not been found in Mien society. The female shaman-priests conduct rituals by singing songs. Many female shamans conduct seance ritual at a shrine in Chiang Rai Province. In this article, I report the organisation of the female shamans at the shrine.

The Pien Hung (referred to as 盤王 in Chinese) shrine of HCP village (the Chiang Rai Province) was rebuilt three times before. There were more than twenty female shamans at that shrine. They are believed to be possessed by gods and conduct themselves as oracles, giving reinforcement and treatment rituals for their clients. A male priest named Pien ZF and a female shaman named Liu MK were leaders of female shamans. Female shamans of HCP Shrine entered into master-disciple relations with Pien ZF and Liu MK. This was formalized by a *piət faːt* ritual which establishes the master-disciple relationship. The *piət faːt* at HCP Shrine was established by borrowing from the form of *piət faːt*. This is a part of the male initiation ritual known as *kwaː taːŋ*. The original *piət faːt* is held between a male master and a male disciple. At the HCP shrine, they created a "female master" and a "female disciple." They then conducted a *piət faːt* between a male master and a female disciple, as well as between a female master and a female disciple. A female shaman has at least one male master and one female master through *piət faːt*. Another master-disciple relation can be added. Most female shamans' male master was Pien ZF, and the female master was Liu MK. Through the *piət faːt*, a woman was confirmed as a shaman and then joined the group of female shamans at HCP shrine. The shamans were integrated into the group of shamans at HCP shrine through the plural master-disciple relations.

In 2019, Pien ZF left HCP shrine and some female shamans also left the shrine. The group of female shamans was divided and the integration through the master-disciple relations collapsed as a result due to the male master's withdrawal.

Rituals at the shrine are reorganisation of existing rituals, giving them a unique meaning by the spirit possession. They created a new category "female master" and the new ritual establishing the master-disciple relationship. They utilised the new ritual for organisational integration by an overlap of the dyadic relationships. However, the group integration based on the multiple dyadic relationships stopped functioning due to the withdrawal of the male master. As a result, it led to the division of the group.

*東京学芸大学　名誉教授

## 1．はじめに

### (1) タイにおけるミエン

ミエン（Mien, Iu Mien イウミエン、ユーミエン）は北部の山地に居住する民族である。中国、タイ、ラオスではヤオ（Yao）、ヴェトナムではザオ（Dao）と他称されてきた。ミエンは焼畑耕作を営み、移住を繰り返して、中国からヴェトナム、ラオスを経てタイへ至った。タイ北部へはラオス経由で19世紀後半に移住してきたと推される。移住の途上で、ミエンは漢民族から道教的色彩の強い儀礼体系や父系理念に沿った親族組織のイデオロギーを受け容れてきた。儀礼文書は漢字で書かれており、儀礼知識の伝承も、多くは漢字による。

少数民族としてのミエンは、マジョリティたるタイ民族の文化の圧倒的な影響力と資本主義のグローバリゼーションに対して、様々な適応を展開してきた。出稼ぎによる現金収入源の多様化（吉野1999, 吉野2003）や文化復興運動（吉野2006, 吉野2010a, 吉野2010b）がそうした適応の例である。焼畑耕作に伴う移動生活をやめ、定住化するのも、近代国民国家タイへの適応の一つである。彼らは焼畑耕作に伴い移住を繰り返し、タイの領域へと移動してきた。しかし、近代国民国家というものは、移動民を忌避し、移動民を定住化して住民登録ないし戸籍登録が容易になるようにしたがる傾向がある。おかげでミエンは1970年代以降、常に定住化圧力を受け続けてきた。定住化圧力の中には、焼畑耕作をやめ定着農耕を営めとの命令も入る。これは進化論思考にもとづく無知の結果生じたイデオロギーであるが、国家の政策として実現すると、焼畑耕作民には大きな圧力として作用する。また、学校教育を通じたタイ国民化の同化圧力もまた、少数民族には強く作用している。

こうした様々な圧力に対するマイノリティとしてのミエンの文化復興運動が1990年代から顕著になってきた。ここでいうミエンの文化復興運動は、単一のアクターが行っているものではない。筆者の言う「ミエンの文化復興運動」は、多様なアクターがおこしている、ミエン文化の文化要素の維持・強化・振興につながる様々な運動の総体を指している。それらには、以下の様な活動が含まれる。

儀礼文書が漢字で書かれているので、漢字学習は儀礼の執行のためにも、また儀礼自体の維持のためにも必要であるが、タイの学校においては当然学べない。それを補うために若者に漢字を教える教習が、2000年代初頭の10年間に複数の村で開かれた。これは山地民援助NGOのIMPECT（Inter Mountain Peoples Education and Culture in Thailand Association）が開いたものも、村独自で開いたものもある。その教習のための教科書もIMPECTが編集・発行した（吉野2010a：287-292, 吉野2010b：92-93, 吉野2014：77-80）。漢字教習に加えて、ミエンの文化を教えるセミナーも開かれた（吉野2010a：292-293, 吉野2010b：93-94, 吉野2014：79, 83-84）。IMPECTはそのセミナーのための教本と、ミエンの伝統音楽のCDや儀礼のビデオも作製した（吉野2010a：292-293, 吉野2010b：93, 吉野2014：76, 79）。また、「ミエンの文化とスポーツの祭典」が、広範なミエン村落のネットワークであるイウミエンネットワーク（เครือข่ายอิ้วเมี่ยน เครือข่ายวัฒนธรรมอิ้วเมี่ยนと称することもある）によって、恐らく1980年代から[1]開かれてきた（吉野2010b：94, 吉野2014：81）。さらに2010年から「ミエンの音楽祭」がチエンセーンで4月に開かれている。これはイ

ウミエンネットワークの主催ではなく、チエンセーン近傍のミエン村落の音楽グループが主催していた。その後主催者が代わり、会場もチエンコーンに移ったが、継続している（2020年は中止）。

こうした文化復興運動の諸活動においては、ミエン文化を若者に教えるセミナーの教本『イウミエンの民俗知識体系の要点』（เครือข่ายวัฒนธรรมอิ้วเมี่ยน *et al.* 2002）などのように元来多様であったミエン文化の民俗知識を一つのスタンダードの枠に固定するような民俗知識の再編が見られるが、同様に民俗知識の再編を伴う現象として、2000年代初頭からミエン社会に生じた新たな宗教現象がある。そこでは、これまで男性が独占してきた儀礼執行に女性が参入し始めた。更に、少なくとも従来のタイのミエンの許では存在しなかった固定的祭祀施設〈廟〉が建設された。これまでにタイのミエンには全く見られなかった現象がミエンの宗教に生じたわけである。この二つの現象は、タイのミエン社会に大きな変化が生じていることを示している。その一つとして、男性祭司の数が減少していることが挙げられる。上の漢字教習の箇所でも書いたが、祭司になるに必要な漢字学習の機会がなくなっており、年配の祭司が死んでゆく一方で、祭司の後継者が補充できていない。しかし、祭司の減少の傍ら、儀礼のニーズは減少していない。女性が儀礼を執行するようになり、他のミエンもそれを受け容れているのは、そうした事態に対する反応の一つであると見られる。また、〈廟〉の建設は、ミエンの生活が移住を前提としたものから定住を前提としたものに変化したことを示している。焼畑耕作に伴う移住を前提とする意識から、1989年の商業的森林伐採禁止令のような焼畑耕作が不可能となる政策と恒常的な定住圧力の結果、定住を常態とする意識へと変化したと考えられる。その結果として〈廟〉の建設に到ったのである。

### (2) 新たな宗教現象

筆者は、この新たな宗教現象の全貌を把握するため、2010年以降多面的に調査を進めた。特に、既存の民俗知識がどのように応用されて儀礼や祭神などが構築されているかという民俗知識の再編に焦点を当てて調査研究を行ってきた。まず、〈廟〉における女性シャマンの儀礼と活動の概要を報告し（吉野2013）、次いで、女性シャマンが読経ではなく〈歌〉を唱って儀礼を執行しており、〈歌〉を儀礼に応用していることを明らかにした（吉野2016）。また、従来の道教・法教[2]的儀礼と比較して、女性シャマンの儀礼が、儀礼執行者、降神、唱え言、言語、祭神等について従来の儀礼に無い特徴を持っており、従来の儀礼がカバーしていない領域の民俗知識を応用していることを示した（吉野2017）（表1参照）。

この新しい宗教現象について今までに明らかになったことをまとめると以下の通りである（吉野2013，吉野2016、吉野2017）。

1）移動生活を続けてきたミエンの村に固定的祭祀施設〈廟〉が建設されるようになった。
2）男性が独占してきた儀礼執行に女性がシャマン（シャマン＝*piəʔ jiem miən*[3]〈入陰人〉）として参入しはじめた。
3）女性シャマンは、従来のような読経ではなく、歌によって儀礼を執行している。
4）儀礼における女性シャマンの歌は、ミエン口語と異なる語彙体系をもつ歌謡語*ʥuŋ ɲei wa:*によって、〈講歌〉*kɔŋ ʥuŋ*という詠唱法によって唱われる。

5）このような廟の建設と女性シャマンの双方あるいは一方を伴う宗教現象は一村にとどまらず、複数のミエン村落に広がっている。

6）従来の儀礼と〈廟〉における儀礼とでは、その特徴の分布が相補的であり、一方が他方にない特徴を持つ傾向にある（表1）。即ち、従来の儀礼が依拠していた民俗知識とは異なる民俗知識を用いて宗教活動を展開してきた。言い換えれば従来の儀礼が関わっていない文化的ニッチを埋める形で宗教活動を展開してきたのである。

このように、これまでは女性シャマンによる新しい儀礼において既存の民俗知識がどのように再編・応用されているかを解明してきたが、本稿では、儀礼を執行する女性シャマンに焦点を当て、どのような女性がシャマンになっているか、〈廟〉に集う女性シャマンの集団がどのように組織化されていたかについて報告する。後で明らかになるが、その組織化にも従来の儀礼知識が再編されて応用されていた。

## 2．〈廟〉の建て替え　チエンラーイ県のHCP村　〈銀山廟堂〉の例

### （1）HCL村の〈廟〉

本稿で報告するのはチエンラーイ県ムアン郡のHCP村の〈廟〉の儀礼であるが、タイのミエンの許で〈廟〉が最初に建設されたのは、チエンラーイ県のドーイルアン准郡（当時）HCL村である。その経緯はモンコンの報告（Mongkhol 2006）に詳しい。HCL村において〈盤王〉*Pien huŋ*を祀る〈廟〉が作られた。モンコンによると、1990年代後半には、この村は経済不振、覚醒剤使用、村内不和などの問題を抱えていた（Mongkhol 2006：262）。近隣の複数の村で、〈盤王〉を祀ると裕福になるとの夢を見た者がいるという話があり、更に2000年の初めにHCL村の70歳の老爺がトランスに入り、村人が〈唐王〉*Toŋ Huŋ*の〈廟〉を建てて〈唐王〉を祀れば、混乱した状態が改善されると託宣した（Mongkhol 2006：262）。〈唐王〉はミエンの祖先が海を渡ったときに〈盤王〉と共に

表1　従来の儀礼と新たな宗教現象の儀礼

| | 祭司が執行する従来の儀礼 | 新たな宗教現象の儀礼（HCP村の〈廟〉） |
|---|---|---|
| 儀礼執行者 | 男性祭司 | 女性シャマン（圧倒的多数）<br>男性祭司（降神して司祭） |
| 降神 | しない | する |
| 儀礼執行者の類型 | Priest（祭司） | Shaman（シャマン）<br>Shaman-priest（シャマン祭司） |
| 唱え言 | 経文（テクストあり）の読誦<br>漢字知識が必要 | 歌（テクストなし）<br>漢字知識は必ずしも必要なし |
| 言語 | *Ʒiə wa:* 儀礼語（「広東語」）<br>*Kʰɛʔ wa:* 漢語雲南方言<br>*Miən wa:* ミエン口語 | *Dzuŋ　ɲei wa:* 歌謡語（文語）<br><br>*Miən wa:* ミエン口語 |
| 祭神 | 〈大堂画〉の神々（道教・法教）<br>〈玉帝〉<br>経文に登場する神々<br>祖先　師父<br><br>〈盤王〉・〈唐王〉（像なし） | 〈老君〉<br>〈郎老〉<br>〈伏羲姉妹〉<br>〈七姐〉<br>〈太白先生〉<br>口承伝承における神々（主要経文には登場しない）<br>〈盤王〉・〈唐王〉（像あり） |

注：〈大堂画〉：〈元始天尊〉、〈霊宝天尊〉、〈道徳天尊〉、〈玉皇〉等の道教・法教の神々を描いた掛け軸状の神画18枚1セットを〈大堂画〉と総称する。
〈玉帝〉：中空に住むとされる神で、〈大堂画〉の〈玉皇〉とは別の神とされる。神画は無い。

彼らを救護した神である。モンコンの記述では、この託宣について、村人たちが相談したが、特に年長の女性たちが〈廟〉建設に積極的であったという（Mongkhol 2006：262）。中国広西のヤオ族の〈廟〉へ行き神像の写真を撮ってきた姉妹がいた。そのうちの一人の家族が村人を説得し、寄附が集まって〈廟〉建設へ動き出した。村人の協議で、託宣にあった〈唐王廟〉ではなく、〈盤王廟〉を作ることとなった。中国で撮ってきた写真を参考にして神像を作り、〈廟〉に祀った（Mongkhol 2006：262-263）。〈廟〉は2000年に完成し、2001年に開眼儀礼が行われ、その後3年間続けて開眼儀礼が執り行われた（Mongkhol 2006：263）。筆者が2003年にこの開眼儀礼を調査したときには、〈盤王〉像の手首に紐を巻く儀礼（後に述べるヘウウアン・ドースウィー）を行っていた。この儀礼では、女性が多数儀礼に参加し、儀礼の司会、儀礼中の唱歌などに積極的に参加していた。先にも引用したように、建設にも女性が積極的に関わっていた。しかし、2000年代初頭の時点では、女性がシャマンとして儀礼に参加することは観察されなかった。現在では2名の女性シャマンが託宣などを行っている。また、〈盤王〉像の後に〈唐王〉像も製作され、現在では〈盤王〉と〈唐王〉が祭壇の中央に祀られている。この〈廟〉で降神したHCPの女性が降神儀礼をHCPに伝えた。

### (2) HCP村の〈銀山廟堂〉の建て替え

HCP村[4]では2004年に「イウミエン文化センター」ศูนย์วัฒนธรรมอิ้วเมี่ยนという名称で、木竹造の平屋建ての建物を建てた。後にこれが最初の廟（以下、〈廟〉Ⅰ）となる（写真1）。この〈廟〉は表向きは宗教施設の形を取らず、「文化センター」を自称した。場所は、村の上方の尾根端に位置し、陸軍の特別部隊の駐屯地に隣接していた（2013年に部隊は撤収した）。建設地の地名がดอยเงิน（銀山）であったので、〈廟〉の名称は〈銀山廟堂〉となっている。ここで、2009年の陰暦八月十五日に最初の降神があった。劉MK（女性）、盤ZF（男性）、鄧LC（男性）の三人に〈盤王〉が降り、託宣した。2010年に主祭神の〈盤王〉の像を設置した。このとき〈盤王〉ほか5体の神像が設置された。2011年には更にいくつかの神像を設置した。

2012年の陰暦正月に隣にあった集会所に神像を移して、そこを第二の〈廟〉（以下〈廟〉Ⅱ。写真2）とし、正月初一日に初儀礼を行った。この移転に際して、〈盤王〉の像を新たに作った。〈廟〉Ⅰは、2012年陰暦三月に取り壊し、その跡地に〈廟〉Ⅲを建設した。2014年陰暦十一月に鉄筋コンクリート造りの〈廟〉Ⅲが完成して（写真3）、2015年陰暦二月廿六日に開廟儀礼を行った。このように、〈廟〉Ⅰから〈廟〉Ⅲに到るまで、短期間のうちに建て直しを繰り返したのであった。〈廟〉Ⅲ建設が可能であったのは、女性シャマンたちのセアンス儀礼に対するクライアントの謝金や〈廟〉への寄附が莫大な額に上ったためであった。

## 3．〈廟〉における儀礼の変化

### (1)〈廟〉Ⅰ、Ⅱにおける儀礼

〈廟〉における儀礼は、陰暦毎月の初一日と十五日に行われる。特に正月初一日～初三日の3日間、七月十四日（漢族の中元節に相当し、祖先祭祀儀礼が各家で行われる）～十五日の2日間は、盛大に行われ、女性シャマンや一般人の参加者も多い。2018年までは、男性祭司盤ZFと女性シャ

マン劉MKを指導者として、女性シャマンたちが降神して儀礼を行っていた。〈廟〉Ⅰ、〈廟〉Ⅱの時には、儀礼の日にクライアントが大勢詰めかけ、病気治しや心配事を個々のシャマンに相談していた。女性シャマンはそれに対して降神し、託宣・儀礼を行った。〈廟〉のあちこちでセアンスが行われ、恰もセアンス大会の様相を呈していたのであった。

写真１　〈廟〉Ⅰ

写真２　〈廟〉Ⅱ

写真３　〈廟〉Ⅲ

しかし、〈廟〉Ⅲが完成すると、〈廟〉Ⅲにおける儀礼に変化が生じた。個々の相談事が減少し、定型的な強化儀礼（招魂儀礼）や、盤ZFや劉MKと女性シャマンたちの師弟関係を確認する儀礼とシャマンたちの集合儀礼（降神して踊る）が増加した。この兆候は〈廟〉Ⅱの時にも見られたが、それがより顕著になった。

〈廟〉Ⅰ、Ⅱにおいて行われていた儀礼行為は以下のものがあった。

1．トラブルの原因究明・儀礼以外の対処指示託宣（女性シャマン　祭壇あり）
2．トラブルに対する対処儀礼（女性シャマン　祭壇あり）
3．トラブルに対する対処儀礼（盤ZF　祭壇あり）
4．定型的な強化儀礼（招魂儀礼、盤王印捺印）（女性シャマン　祭壇なし）
5．降神してのマッサージなど（女性シャマン　祭壇なし）
6．ゲストの見者（男性）による診断

1は女性シャマンにトラブルなどの解決を相談する。女性シャマンは降神して、憑依した神がその相談に答える。このときも歌で答えていた。2は、降神するが、託宣を行うのではなく、憑依した神の指示に従って、祭壇を使った儀礼を行う。3は同様の儀礼を男性祭司の盤ZFが行うものである。その時にも降神している。4はヘウウアン・ドースウィー *heu wuən do swi* という儀礼と、ボッイェン *bɔʔ jiən* という儀礼である。これらはクライアントの身体を強化あるいは保護する儀礼

である。ミエンの霊魂観では人間には10の霊魂があるが、身体から離脱可能である。その身体から離れている魂を呼び戻し、手首に紐を巻いて定着させる。これによりクライアントの心身強化を図るのがヘウウアン・ドースウィーの儀礼である。恰もタイ族のเรียกขวัญのような儀礼である。ボッイェンは、〈盤王印〉という大きな印をクライアントの着衣した背中に捺印する儀礼であり、〈盤王〉の加護を得られる。いずれも強化儀礼に類する儀礼である。5は降神した女性シャマンが、クライアントの身体の悪いところをマッサージして治療する。6は他所の村から招聘した男性見者（seer）が、失せ物などのクライアントの心配事に対し、降神して見えた事に基づきアドバイスを与える。このように、多様な儀礼がクライアントの求めに応じてなされていた。

### (2)〈廟〉Ⅲ完成後の儀礼と統制の強化

これが、〈廟〉Ⅲ完成後は、以下のようになった（番号は上記の儀礼行為の番号）。

3．トラブルに対する対処儀礼（盤ZF　祭壇あり）

4．定型的な強化儀礼（招魂儀礼、盤王印捺印）（女性シャマン　祭壇なし）

5．降神してのマッサージなど（女性シャマン　祭壇なし）

1と2は甚だしく減少し、まれにしか行われなかった。6は、筆者の観察する限り（陰暦正月と七月）、行われなかった。祭壇を設置する祓除儀礼や治療儀礼などの対処儀礼は、盤ZFが執行する儀礼に限定される傾向にあった。女性シャマンはその助祭司か助手として儀礼に参加していた。また、組織統合が強まると、古参で独自のクライアントをもっている有力な女性シャマンが徐々に廟の儀礼に参加しなくなった。理由は、廟の儀礼に出ても活躍の場がないからであった。古参の盤MFは「新しい〈廟〉ができてから、女性シャマンが儀礼を行うのを盤ZFが好まなくなってきたので、現在は遊びに来ているだけ（儀礼は行わない）」と言っていた（2016年8月）。盤MFは自宅に祭壇を構え儀礼を行っている。やはり古参で、村外での儀礼活動を活潑に行っている盤NTは、以前は正月初一日、七月十四・十五日にはHCP村に戻り〈廟〉の儀礼に参加していたが、〈廟〉Ⅲになってからは参加していなかった。

上記の3種の儀礼に加え、〈廟〉Ⅲになってから顕著に行われるようになった儀礼がある。

7．師弟結縁儀礼

8．女性シャマンの集合儀礼

9．〈師〉や〈廟〉の長老に対する謝恩儀礼

7は、後で述べる、女性が盤ZFおよび長老の女性シャマンと師弟の関係を確立する儀礼である。〈廟〉Ⅰ、Ⅱのときにも行っていたのであるが、〈廟〉Ⅲになってから頻度が上がった。その結果として、2013年時点で二十数名であった女性シャマン数は、2016年時点で三十数名～四十名以上（盤ZFも正確な数字は覚えていなかった）と急激に増えたのである。8は女性シャマンたちが神前において集団で舞う儀礼である。9は、8に続けて行われることが多かったが、盤ZFや劉MKの弟子に当たる女性シャマンが〈師〉に感謝を伝える謝恩儀礼である。同様の謝恩儀礼が、〈廟〉の委員などの長老に対しても行われた。謝恩の印として各シャマンが花を捧げることもあった。〈廟〉Ⅲにおける儀礼では、盤ZFとその2人の息子盤CFと盤SFが儀礼を先導していた。3対処儀礼の時には

盤ZFに加えて盤CFが重要な司祭を担当し、8. 集合儀礼の時には盤SFが指導的役割を演じていた。この傾向は〈廟〉Ⅲになってから顕著になった。ところが、女性シャマンが増加した一方、廟が新しくなったにもかかわらずクライアントの数は減っていた。〈廟〉Ⅱのときには正月、七月十四日・十五日には一日で寄附者が40名を超えたこともあった。しかし、〈廟〉Ⅲになってからは、正月と七月には寄附者が10名を超えたが、その他の月の儀礼の時には寄附者が2, 3名ということもあった（寄附者記名簿による）。これは、上記の儀礼の変化に関連している。即ち、クライアントの個人的な相談事に対応する儀礼が減ったのに対し、女性シャマンの集合的な儀礼や、〈師〉や長老に対する謝恩儀礼といった内向きのものが増えたからである。〈廟〉Ⅰ、Ⅱのときには女性シャマンが霊能を発揮して個々にセアンスを行っていたが、〈廟〉Ⅲ完成を期に女性シャマンの個々の活動を制御し、盤ZFを頂点とする女性シャマン集団の組織統合を図った。これに伴い、古参の実力のある女性シャマンが離脱し、統合がより強化された。

## 4．師弟関係による組織化

### (1)〈入陰〉

それでは、女性シャマン集団の組織化はどのようにしてなされていたのであろうか。筆者は2012年から、〈銀山廟堂〉に集う女性シャマン26名に聴き取りを行った。ミエン語でトランスに入り降神することをピアッイェム（*piəʔ jiəm*〈入陰〉）という。ミエンのシャマニズムは憑依型であり、表2に示したように、様々な神が降神する。〈入陰〉すると、師となる者との師弟関係を結ぶ。そのときに男性と女性の二人以上の師と師弟関係を結ぶのである。そうして、〈廟〉で活動できるシャマンとなる。女性シャマンの中にはミエンではない漢人女性もいた。彼女は30歳代で〈入陰〉と結縁儀礼を経ている。儀礼の時にはミエンの服装で参加していた。

### (2)〈入陰〉の年齢

女性シャマンが〈入陰〉してシャマンとなった年齢は、60歳代で〈入陰〉した例もあるが、40歳代後半から50歳代が圧倒的に多い。発表者がインタビューした女性シャマンの中には20歳代で〈入陰〉した人は皆無であり、30歳代で〈入陰〉した人は1名いただけである。1名だけ11歳で〈入陰〉・結縁儀礼を行った少女がいたが、県外在住で、〈廟〉の儀礼の常連ではない。現役で〈廟〉の儀礼を行っているのは、大半が50歳代から60歳代である。子育ても終わり、子どもたちが独り立ちして家内の仕事の手が空いた女性が多く参加しているのである。

### (3) 師弟関係の結縁

先に、〈廟〉Ⅲになってから師弟の結縁儀礼が増えたと述べた。一般に宗教職能者の男性の師はサイティア（*sai tiə*〈師父〉）という。これに対して、〈銀山廟堂〉の女性シャマンたちは女性の師をサイマー（*sai ma:*〈師母〉）という。弟子は〈師父〉、〈師母〉とそれぞれ別個に師弟関係を結ぶ。シャマン＝〈入陰人〉（*piəʔ jiəm miən* ピアッイェムミエン）として活動している者は〈師父〉と〈師母〉との結縁儀礼を行っていた。表2は、26人の女性シャマンが誰と師弟関係を結縁していたかを示したものである。

表２　女性シャマンの履歴と師弟関係

| 番号 | 調査時 | 氏名(仮名) | 村 | 生年 | 初入陰 | 師1 | 師2 | 師3 | 師4 | 神 | | 2019年：○残留/×離脱 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2012/8/16 | 劉MK | HCP | 1962 | 2007 | B | C | D | | 〈七姐〉〈盤王〉 | | ○ |
| 2 | 2015/2/20<br>2016/8/17 | 盤MF | PK | 1968 | 2006 最初に入陰　HCPの廟で三回焼香したら入陰した | A | 1 | | | 陰間師父：〈盤王〉〈郎老〉<br>陽間師父：A　陽間師母：1<br>→設鬼のとき話神する。 | 設鬼して7年　歌は歌わない | ○(復帰) |
| 3 | 2015/2/20 | 趙FH | PKZ | 1954 | 2008頃 | A | 1 | | | 〈盤王〉(唱わず、話す) | | × |
| 4 | 2012/8/18<br>2013/5/24 | 趙fH | HCP | 1957 | 2009　HCLへ行って3年で入陰 | A | 1 | 3 | | 〈七姐〉〈郎老〉〈老君〉 | 3の妹<br>焼香すると降神する | ○ |
| 5 | 2012/8/18 | 盤MG | HL | 1950 | 2009(丑年)　4と同じ年 | A | 1 | | | | | ○ |
| 6 | 2013/5/24 | 盤CY | | 1957 | 2009 | A | 1 | | | 〈七姐〉 | | ○ |
| 7 | 2013/8/21 | 盤FC | PKZ | 1960 | 2009 | A | 1 | | | | 5の妹 | ○ |
| 8 | 2015/8/29 | 鄧ML | HL | 1950 | 2009頃(廟Ⅰの時) | A | 1 | | | 〈七姐〉の長姉 | | × |
| 9 | 2015/2/20 | 李CL | | 1939 | 2009頃(廟Ⅰの時) | A | 1 | 8 | 3 | 〈郎老〉〈盤王〉 | | ○ |
| 10 | 2013/5/24 | 馮KZ | KN | 1953 | 2009頃(廟Ⅰ建設時) | A | 1 | | | 〈盤王〉の助手(女性)の神 | | × |
| 11 | 2015/2/20 | 盤CW | HCP | 1954 | 2009頃(廟Ⅰの時) | A | 1 | | | | | ○ |
| 12 | 2015/2/20 | 鄧MZ | PK | 1972 | 2009頃(廟Ⅰの時) | A | 1 | E | | | | × |
| 13 | 2018/2/17 | 趙MZ | KD | 1956？ | 2009頃(廟Ⅰの時) | A | 1 | 3 | | | | ○ |
| 14 | 2015/2/20 | 盤YL | HCP | 1947 | 2010 | A | 1 | | | | | ? |
| 15 | 2013/8/21 | 趙NH | PKh | 1952 | 2010九月初一日 | A | 1 | 8 | | | 3の姉 | × |
| 16 | 2019/8/14 | 盤NT | HCP | 1961 | 2010九月 | A | 1 | | | 〈唐王〉〈七姐〉 | | ○(復帰) |
| 17 | 2013/5/24 | 馮NF | | 1966 | 2011 | A | 1 | | | 通常は〈七姐〉。〈盤王〉が降神することもある | | ○ |
| 18 | 2015/8/28 | 盤NH | PK | 1970 | 2011 | A | 8 | | | 太白先生 | 歌は歌わない | ? |
| 19 | 2015/2/20 | 李ZL | PhKh | 1961 | 2012(廟Ⅱで入陰　発病して相談し、快復) | A | 1 | F | | 〈五姐〉 | | ○ |
| 20 | 2015/2/20 | 陳FZ | KN | 1947 | 2012頃 | A | 1 | | | | | ? |
| 21 | 2015/2/20 | 劉CZ | HCP | 1955 | 2012頃 | A | 1 | | | 〈三姐〉〈七姐〉〈唐王〉〈老君〉〈郎老〉など | | ○ |
| 22 | 2015/2/20 | 盤MF | | 1973 | 2013(巳年) | A | 1 | | | | | × |
| 23 | 2015/8/28 | 鄧MF | STh | 1975 | 2014 十月 | A | 3 | | | 〈観音〉 | Aと2回ﾋﾞｴｯﾄﾌｧｰﾄ | ? |
| 24 | 2015/2/20 | 楊DS | LK | 1981 | 2014 三月 | A | 1 | | | | 渡人　バンコクで2年マッサージしていた。 | ○ |
| 25 | 2015/8/28 | 趙CK | STh | 2004 | 2014 | A | 8 | | | 〈龍王〉 | | ? |
| 26 | 2018/2/16 | 劉CF | HCP | 1937 | 2015 | A | 3 | | | 〈七姐〉 | | ? |

注：漢字で書かれた月日は陰暦の月日である。

■＝男性

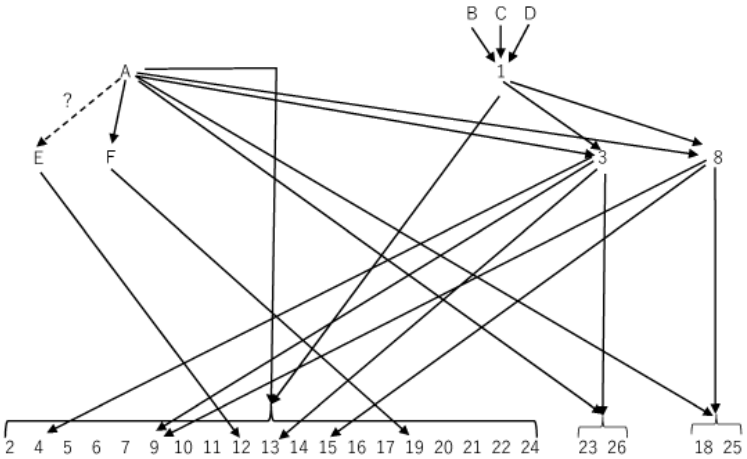


図１　師弟関係　数字は女性、アルファベットは男性。矢印は「師→弟子」の関係。

1劉MK以外の全ての女性シャマンがA盤ZFという男性祭司を師父としていた。一方、大半の者が女性シャマン1劉MKを〈師母〉としていた。しかし、少数の者は1劉MK以外の女性を〈師母〉としていた。3鄧FHが最初の〈師母〉という者と、8鄧MLを最初の〈師母〉とする者はそれぞれ2名であった。

参加する女性シャマンたちは、男性祭司の盤ZFを〈師父〉、女性シャマンの劉MKや2人の古株女性シャマンの1人を〈師母〉として、2人の〈師〉と師弟関係を結んでいた。そのための結縁儀礼も多く行われるようになってきた。インタビューした25名（1劉MKを除く）の女性シャマンのうち、全員がA盤ZFを〈師父〉とし、21名が1劉MKを〈師母〉として師弟の関係を形成していたのである。図1を見ると分かるように、その師弟関係は単純なものではない。師弟関係は重複しうるからである。例えば9李CLの場合、A盤ZF・1劉MKと師弟関係となっている上に、3趙FH・8鄧MLとも師弟関係を結んでいた。4趙FHと13趙MZはA盤ZF・1劉MKのほか、3趙FHと師弟関係を結び、15趙NHはA盤ZF・1劉MKおよび8鄧MLと師弟関係を結んでいた。更に、A盤ZF以外の男性祭司と師弟関係にあるものもいる。12鄧MZはA盤ZF・1劉MKのほかにEと師弟関係にあり、19李ZLはA・1およびFと師弟関係を結んだ。F（盤CF）はA盤ZFの息子であり、父親と師弟関係があるが、Eが盤ZFと師弟関係を結んでいるか否かは不明である。

### (4) 女性シャマンの統合と格付け

図で見たように、A盤ZFと1劉MKを〈師父〉〈師母〉とした師弟関係を主軸として、3趙FHと8鄧MLを〈師母〉とする関師弟係やその他の男性祭司を〈師父〉とする師弟関係が重なっている。女性シャマンについてみれば、1劉MKを頂点として、その下に3趙FHと8鄧MLが〈師母〉となるシャマン、その下にその他のシャマンという格づけの層序がみられた。儀礼の中でも、3趙FHと8鄧MLは先導的役割を担っていた。もっとも、3趙FHも8鄧MLも1劉MKの弟子であるので、3趙FHまたは8鄧MLを〈師母〉とする者は1劉MKの孫弟子ということになる。このように、A盤ZF・1劉MKとの師弟関係を主軸に、それ以外の師弟関係が重なる関係によって〈銀山廟堂〉に集う女性シャマンたちは統合されていた。更に、女性シャマンの中にも、1＞3, 8（〈師母〉となれる）＞その他の女性シャマンという格付けがこの統合を支えていた。

### (5) ピエット・ファートの借用再編と〈師母〉の創作

〈銀山廟堂〉に集う祭司とシャマンたちは、〈師父〉－弟子という男性の師弟関係をモデルとして〈師母〉という概念を新たに作り出し、〈師父〉－弟子、〈師母〉－弟子という両性の師弟関係を創出したのである。〈師父〉という観念は従来の儀礼の中で明確に伝えられてきた。這般の事情を述べる。

男性のイニシエーション儀礼として位置づけられているのが、〈掛燈〉*kwa: ta:ŋ*という儀礼である。この儀礼は、祭司の叙任式の形式をとっており、この儀礼を経た男性は儀礼を執行する司祭能力があろうとなかろうと、形式上は祭司となり、俗名とは異なる儀礼名（〈法名〉*fa:t buə*）を得る。即ち、全てのミエン男性が形式上祭司となる事が期待されているのであり、これを筆者は曽て「総体的祭司制」と謂った（吉野 1993）。この〈掛燈〉のと

きに受礼者である〈師男〉*sai naːm*は３人の〈師〉と師弟の縁を結ぶ。〈祖本師〉*tsu-puən sai*、〈開教師〉*kʰɔi jaːu sai*、〈保重師〉*pu tsoŋ sai*の３人である。〈祖本師〉は父親、〈開教師〉は父系親族の男性が務めるのが望ましい。これは、父系親族関係を師弟関係に読み替えることでもある（吉野 1993）。その結縁儀礼はピエット・ファート*piət faːt*という。漢字で書くと*faːt*は〈法〉だが、*piət*〈竹冠＋口＋專〉の漢字のフォントがないので、本稿では「ピエット・ファート」と記すことにする。ピエット・ファートは、香炉を下に置き、そこに〈棍〉という儀礼に用いる杖を立て、〈師父〉と弟子〈師男〉とがともに〈棍〉を握り、足を香炉に掛け、呪句を唱えるものである（写真4）。

写真４　〈掛燈〉におけるピエット・ファート
向かって右が〈師父〉、左が〈師男〉。
二人とも香炉に足を掛け、〈棍〉を
握っている。

従来の道教・法教的儀礼では、個人毎の〈師父〉がこのように決まる。道教・法教的儀礼では、関わるのは男性祭司のみであり、師弟関係も〈師父〉−〈師男〉という系列しかなかった。女性が道教・法教系統の儀礼に祭司者として参入することはなかった。そのため、〈師母〉はもともと存在しなかった。しかし、〈銀山廟堂〉のシャマン集団では、〈師母〉という新たな役割を創出し、女性シャマンの統合に応用していた。即ち〈銀山廟堂〉における女性シャマンの結縁儀礼は、この〈掛燈〉のピエット・ファートの形式と名称を借用したものであった。〈廟〉における儀礼で〈入陰〉を経験した者は、ピエット・ファートを行い、〈入陰人〉になる。即ちピエット・ファートは〈入陰人〉となったことの認証であり、同時に〈銀山廟堂〉の女性シャマン集団への加入の認証でもあった。〈掛燈〉のピエット・ファートと同様に、香炉を置き、〈師父〉と弟子、〈師母〉と弟子が〈棍〉を握って、両者が〈棍〉に足の先を掛ける。〈掛燈〉のピエット・ファートとは些細な点で異なるが、全体としては同じ形式を踏襲している。しかも、〈掛燈〉におけるピエット・ファートが1回限りであるのに対して、〈銀山廟堂〉のピエット・ファートは、初めに〈師母〉〈師父〉とピエット・ファートした後に、別の〈師母〉〈師父〉とピエット・ファートすることが可能であった。即ち、師弟関係の重複が可能であった。こうした師弟関係という二者間関係（dyadic relationship）の重複によって集団の統合を図ったものと考えられる。

写真５　〈銀山廟堂〉におけるピエット・ファート
向かって右側が〈師父〉、左の女性が弟子。

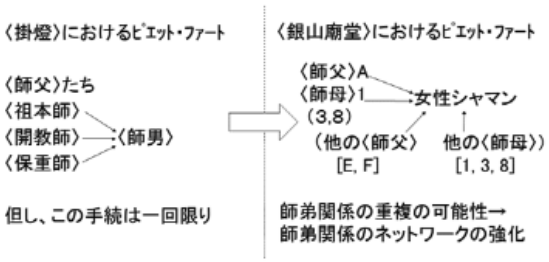


図２　ピエット・ファートに関する知識の再編

## ５．儀礼集団の分裂

### (1) 盤ZFの離脱

しかし、その後に大きな変化があった。2019年の正月初一日以降、盤ZFは〈銀山廟堂〉に現れなくなった。2018年まで指導者として儀礼を先導してきた盤ZFが〈銀山廟堂〉の儀礼から離脱したのである。その理由は、儀礼の謝金を巡る金銭トラブルで女性シャマンから批判されたためであった[5)]。2019年の陰暦正月以降、盤ZFは〈廟〉の儀礼に参加していない。盤ZFの息子の盤SFは正月の儀礼には参加したが、陰暦七月の儀礼には参加しなかった。また、もう一人の息子盤CFも2019年の正月儀礼と七月十四日・十五日の儀礼には参加していない。筆者は2019年２月５日、６日（陰暦正月初一日、初二日）の正月儀礼と８月14日・15日（陰暦七月十四日、十五日）の二回しか観察していないので、他の月ではどうか確認できない。しかし、残留した女性シャマンの説明では、盤ZFとその息子たちは最終的に離脱したことになる。

### (2) 女性シャマンの離脱

盤ZFの離脱に伴って、三分の一ほどの女性シャマンが〈廟〉の儀礼に参加しなくなった。彼女らは比較的古くからの参加者であった。逆に、〈廟〉Ⅲになってから盤ZFの統制に反発して離反していた古参のシャマンが２名、〈廟〉に戻ってきた。〈廟〉の儀礼に残った女性シャマンは劉MKの指導下にある。表１の最右欄に、離脱した女性シャマン（×）と残留した女性シャマン（〇）を示した。但し、上記のように観察機会は限られているので、次のように判断した。まず、従来毎年の陰暦正月初一日～初三日の儀礼と七月十四日～十五日の儀礼に参加していた「常連」であった者が2019年の正月初一日～初三日の儀礼と七月十四日～十五日の儀礼で見かけなくなった場合、また、残留した女性シャマンの証言で「彼女も離脱した」ということが分かった者について離脱したと判断し×をつけた。常連でなく単に個人的事情で欠席している者もいるはずである。そうしたケースには？をつけた。？は、欠席しているが、離脱したか否か判断できないケースである。

### (3) 分裂後の儀礼の変化

2018年までは〈師父〉と〈師母〉の両方と結縁してシャマンとなっており、師弟関係という二者間関係の重複によってシャマン集団を統合していた。それが〈師母〉派と〈師父〉派に分裂し、前者が〈廟〉の月例儀礼に残った。2019年以降の〈銀山廟堂〉における主な儀礼は以下の通りである（2019年陰暦正月・七月の観察による。番号は上記3.（1)、(2）の〈廟〉Ⅰ～Ⅲにおける儀礼の番号である)。

1．トラブルの原因究明・儀礼以外の対処指示託宣（女性シャマン　祭壇あり）
2．トラブルに対する対処儀礼（女性シャマン　祭壇あり）
4．定型的な強化儀礼（招魂儀礼のみ。盤王印捺印は無し）（女性シャマン　祭壇なし）
5．降神してのマッサージなど（女性シャマン　祭壇なし）
8．女性シャマンの集合儀礼

盤ZFの統制がなくなったため、〈廟〉Ⅰ、Ⅱの当時に盛んに行われた1～2の女性シャマンのセアンス儀礼が復活している。4の強化儀礼は、ヘウウアン・ドースウィーは依然として行われているが、離脱した8鄧MLが担当していた盤王印捺印儀礼は無くなった。

### (4) 師弟関係と分裂

上記のように盤ZFの離脱に触発された女性シャマンが同様に離脱した。興味深いのは、3趙FHと8鄧MLが離脱したことである。この両名は古株の女性シャマンであり、何人かの女性シャマンの〈師母〉となっていた。先に述べたように、劉MKほどではないが、〈師母〉たりうる格付けにあった。

盤ZFを〈師父〉、劉MKを〈師母〉とする師弟関係を基軸に、その他の師弟関係を重複させることで、シャマン集団の統合を図っていたのであるが、盤ZFが離脱してしまったために、その前提が崩壊したのであった。個々の師弟関係が今回の離脱行動に影響しているか見てみる。まず、劉MKを除く全ての女性シャマンは盤ZFを〈師父〉としていたので、〈師父〉との師弟関係は離脱／残留には関わらない。盤ZFの弟子の中で離脱／残留が分かれているからである。また、25名中21名が1劉MKを〈師母〉としているので、これも同様に離脱／残留に関わらない。1劉MKのみを〈師母〉としていても離脱した者がいるからである。一方、残留した女性シャマンは皆1劉MKを〈師母〉としている。3趙FH、8鄧MLを〈師母〉とする師弟関係が離脱に影響していると予測されるが、1劉MKに加えて3趙FHも〈師母〉とした3名（4，9，13）は残留している。9は8鄧MLも〈師母〉としている。一方、3趙FHのみを〈師母〉としていた23と26は2019年正月初一と七月十五日の儀礼には参加していなかったが、それ以前に常連であったわけではないので、離脱した結果の欠席か、単に個人的理由で欠席したのかは判断できない。8鄧MLのみを〈師母〉としている18と25についても同様である。師の離脱に同調したのか、単に欠席しているだけかは分からない。

このように、師に伴って離脱した可能性はあるが、師弟関係は離脱／残留の行動を起こす要因としてはさほど強くは作用していないことが見て取れる。寧ろ個人的な好悪によって離脱／残留が決まったと見られる。それゆえ、師弟関係は弟子の行動をしばる強力な関係ではなく、〈入陰人〉に

なったことの認証、女性シャマン集団加入の認証の意味合いが強かったと考えられる。即ち〈入陰人〉としてのアイデンティティを確立し、諸個人を〈銀山廟堂〉のシャマン集団につなぎ止めるものであった。〈銀山廟堂〉のシャマン集団の統合が、師弟関係という二者間関係の重複のみによっており、それ以外の集団統合の機序がなかったため、盤ZFの離脱により師弟関係の重複が崩れ、〈師母〉派と〈師父〉派に分裂して統合を保てなくなったのである。

また、女性シャマンと盤ZFとの対立は、〈廟〉Ⅲができた後にある程度顕在化していた。2盤MFと16盤NTが〈廟〉Ⅲになって儀礼に参加しなくなったが、盤ZF離脱後に儀礼に復帰している。ここに、盤ZFの儀礼の統制と女性シャマンの自由なセアンス志向との対立があったことが見て取れる。事実、〈廟〉Ⅲになって行われなくなった女性シャマンの活動（1. 託宣と 2. 対処儀礼）が、分裂後に復活している。即ち、今回の分裂の直接的原因は鄧ZFの金銭トラブルであったが、その背景には、〈銀山廟堂〉の発展を支えた女性シャマンの自由なセアンスへの志向と、それを抑制して儀礼活動を自らが執行する儀礼に収斂させようとした盤ZFの方針との対立があったのである。

## 6. おわりに

HCP村の〈銀山廟堂〉における儀礼は、女性シャマンが霊能を発揮して個々にセアンスを行っていた状態から、〈廟〉Ⅲ完成を期に女性シャマンの活動を制御し、盤ZFを頂点とする女性シャマン集団の組織統合の段階に移行した。〈銀山廟堂〉における儀礼は、既存の儀礼を再編し、降神による独自の意味を与えたものである。それに加えて、既存の儀礼にあった〈師父〉と〈師男〉（弟子）との結縁儀礼を借用して、〈師母〉と女性シャマンの結縁儀礼を新たに作り出し、組織統合に活用した。しかし、師弟関係の重複による集団統合は、〈師父〉の離脱により機能しなくなり、集団が分裂するに至ったのである。今後は残留した女性シャマンたちがどのような手段により集団統合を図ってゆくかが大きなテーマとなる。

## 付記

本稿は、2018年6月2日の第52回日本文化人類学会研究大会（弘前大学）における筆者の発表「女性シャマンたちの活動と師弟関係：タイ北部、ミエン（ヤオ）社会における新たな宗教現象に関する中間報告5」を基にして、内容を大幅に修正加筆したものである。一部内容は2020年5月31日予定の第54回日本文化人類学会研究大会（早稲田大学）における発表「〈廟〉における儀礼組織の分裂：タイ北部、ミエン（ヤオ）社会における新たな宗教現象に関する中間報告6」の発表内容に基づいている。また、本稿は学術研究助成基金助成金（科研費　課題番号26370944, 18K01186）による研究の成果である。

本稿の査読過程では、2名の査読委員に貴重な指摘をいただいた。茲に深謝申し上げる次第である。

## 註

1）Jonssonによると、「第13回イウミエン競技会」（thirteenth Iu Mien Games）が2001年に開かれた（Jonsson 2005：117-119）。この大会はほぼ毎年開かれていたので、第1回は1980年代に遡ることになる。

2）法教とは、中国・台湾の民間信仰において辟邪・治病・祓除・祈祷・卜占等を行う「法師」が奉じる宗教である。祭神などに道教的要素を持つが、より呪術性が強く、教団などの組織はなく、教義も明確ではない。台湾では道教とは区別される（cf. 劉1994、劉2018：17-24, 口絵「法教の掛図」）。台湾以外の中国でも、道教的要素を持つが、道教と異なり、民間信仰ゆえに組織性が弱く、より呪術性が強い宗教形態を法教という（cf. 丸山2018：90-91）。ミエンが受容したとされる閭山教と梅山教は法教に分類される。一方、ミエンは道教の正一教と共通する神も祀っており、道教の影響も見られる。

3）ミエン語の表記はIPAを用いる。ミエン語には声調があるが、本稿では表記を省略する。ミエンが使っている漢字は山括弧〈　〉で括って示す。

4）HCP村における調査は、2010年以降毎年、基本的に陰暦正月初一日～三日、七月十四日（祖先祭祀が行われる日）・十五日に行ってきた。別の月に行った時もある。

5）この経緯については詳しい事情を訊いているが、詳しい事情は公にしてほしくないとのインフォーマントの依頼により、簡単な説明に留める。

## 参照文献


Jonsson, H. 2005 *Mien Relations: Mountain People and State Control in Thailand*. Ithaca: Cornell University Press.

丸山　宏 2018「ヤオの儀礼と漢字経典」『横浜ユーラシア文化館紀要』6:88-98.

Mongkhol Chantrabumroung 2006 Reproduction of Yao culture: a case study of Pien Hung shrine at Ban Huey Chang Lod in northern Thailand.　塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』（国立民族学博物館調査報告63）吹田：国立民族学博物館、pp.249-266.

Purnell, H.C.（compl. and ed.）2013 *An Iu-Mien – English Dictionary with Cultural Notes*. Chiang Mai: Silkworm Books.

吉野　晃 1993「師弟関係にある父子 ―タイ北部、ミエン族の〈掛燈〉儀礼に見られる父系理念―」『東京学芸大学紀要 第三部門　社会科学』44、pp.173-187.

吉野　晃 1999「焼畑から出稼ぎへ―タイにおけるミエン・ヤオ族の出稼ぎに関する調査の中間報告―」『東京学芸大学紀要　第三部門　社会科学』第50集、pp.81-90.

吉野　晃 2001「Ⅱ　第1章　ヤオ族と道教」野口鐵郎・遊佐昇・野崎充彦・増尾伸一郎（編）『講座　道教　第6巻　アジア諸地域と道教』雄山閣、pp.68-83.

吉野　晃 2003「タイ北部、ミエン族の出稼ぎ ―二つの村の比較から―」塚田誠之（編）『民族の移動と文化の動態 ―中国周縁地域の歴史と現在―』風響社、pp.159-192.

吉野　晃 2006「タイにおけるユーミエン（Iu Mien）の文化復興運動概況」塚田誠之（編）『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』（国立民族学博物館調査報告63）国立民族学博物館、pp.267-284.

吉野　晃 2010a「タイ北部におけるユーミエン（ヤオ）の儀礼体系と文化復興運動」鈴木正崇（編）『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社、pp.273-299.

吉野　晃 2010b「タイにおけるユーミエンの村落を越えたネットワーク」塚田誠之（編）『中国南北の国境地域における多民族のネットワーク構築と文化の動態（課題番号19401046　平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書）』国立民族学博物館塚田誠之、pp.91-99.

吉野　晃 2013「廟と女性シャマン：タイ北部，ユーミエン（ヤオ）の新たな宗教現象に関する調査の中間報告」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』64、pp.115-123.

吉野　晃 2014「タイ北部、ユーミエンにおける儀礼文献の資源としての利用と操作」武内房司・塚田誠之（編）『中国の民族文化資源 ―南部地域の分析から―』風響社、pp.63-90.

吉野　晃 2016「〈歌〉の詠唱法と儀礼への応用：タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の新たな宗教現象に関する調査の中間報告2」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』67、pp.103-110.

吉野　晃 2017「相補展開：タイ北部ミエン（ヤオ）における新しい宗教現象の伝承的基盤」（ヤオ族の宗教文化と道教）日本道教学会第68回大会発表（2017年11月11日、國學院大學）、『日本道教学会第68回大会要項』pp.22-23.

劉　枝萬 1994『台湾の道教と民間信仰』風響社.

劉　枝萬 2018『台湾の法教 ―閭山教科儀本と符式簿の解読―』風響社.

เครือข่ายวัฒนธรรมอิ้วเมี่ยน *et al.* 2002 *สาระองค์ความรู้ภูมิปัญญาท้องถิ่นอิ้วเมี่ยน (เย้า)* เครือข่ายวัฒนธรรมอิ้วเมี่ยน องค์กรชุมชนบ้านปางค่า-บ้านปางพริก สมาคมศูนย์รวมการศึกษาและวัฒนธรรมของชาวไทยภูเขาในประเทศไทย สำนักงานการประถมศึกษาจังหวัดพะเยา สำนักงานการประถมศึกษาอำเภอปงจังหวัดพะเยา